

10月5日 年間第27主日

創 2:18～24 ヘブ 2:9～11 マコ 10:2～16

1. マコ

主イエスは再び群衆に向かって教えておられました。するとファリサイ派の人々がイエスを試そうとして議論をしかけて来ました。8:11にも述べられている「試そうとして」とは、12:13の「言葉じりをとらえて陥れようとして」と同じ意味です。離婚は正当に承認し得るかという議論は、人間社会の中で古くて新しい問題でありながら、神のことばを聞くよりはむしろ人を断罪する口実としてのみ使われて来ました。歴史の教会は主イエスの答えを、離婚に対するあたかも“法的な有罪判決”でもあるかのように、理解して来たと言ってよいでしょう。

しかしこの福音書のテキストが語っている重要な点は、主イエスがこの問題を考えるために創世記の記事に言及されたことにあります。結婚とは本来何なのかを、創世記の記事を指摘することによって考え、神の人間創造の目的に私たちが心を向けることを、主は求められたのでした。

2. 創

創世記には互いに性格の異なる二つの創造物語りが収録されていて、それが相互に補い合う形で神の救済史の最初の部分を形成しています。1:1～2:4aはP資料、2:4b以下(4:26まで)はJ資料と呼ばれているものです。P資料によれば人間は「神にかたどって」創造されました。それに対してJ資料は、「生きる者となった」(2:7)人間は「肉にすぎない」(6:3)のものであって、知識を得たり物事を判断して行動したり出来る可能性を与えられると同時に、神に背いて罪を犯す可能性も持ったものとして描いています。P資料が人間を他の全被造物を支配するものとして造られた(1:26)と述べているのに対して、J資料は人間を他の被造物に名を付けるものとして(v.19-20)描いています。

最初の人アダムは、神が「自分に合う助ける者」(v.20)として造ってくださった相手に二つの名を与えました。その一つは「イシャー」(v.23)で、男と女の深い関係性を言い表しています。

v.24 「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」

主イエスは言われました。「だから二人はもはや別々ではなく、一体である。」(マコ 10:8)

もう一つが「エバ」(3:20)で、これは彼らが罪を犯して最初の樂園の秩序が破壊された後の命名です。それは罪と死が入り込んで来た世に、なお希望を与える名前でした。女は新しく誕生する命の源泉となりました。「彼女がすべて命あるものの母となったからである」(3:20)と説明されています。

3.

現代日本において、非常に高い離婚率と、男女とも(法的に)結婚しない人々の急激な増加は、旧来の結婚観の相対的無力化をもたらしました。特に旧来のキリスト教的倫理観の中で育った人々は、今やどう判断してよいのか全く分からなくなってしまっています。しかしそれは決して神も聖書も今や沈黙してしまった……、無力になって現代には通用しなくなったということではないのです。

神はこの罪の世界に向かって語り続けておられます。現代のキリスト者は過去の時代の無知と不信仰を悔い改めて、今こそ聖書を通して語られる神のことばに心の目と信仰の耳を開くべきなのです。主イエスがファリサイ派の人々に答えて言及された人間の創造物語りからの引用と、それに加えた解説は、人間の罪によって破壊された本来の原初の秩序を私たちに思い起こさせるものです。

「しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。」(マタ 10:6-8)

私たちキリスト者は、人間の罪とはいったい何なのか、どこからの、どのような神のみ旨からの背反であったのかを、聖書のこれらのテキストを通して示されているのです。私たちは自力で原初のエデンの園に帰って、もう一度罪のない生活を始めるなどということは出来ません。聖書は罪と死が入り込んだ現実の世への、イエス・キリストによる救いの福音を語っているのであって、決して罪人を滅ぼすための断罪の書ではないのです。

「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」(ヨハ 3:17)

4. ヘブ

私たちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられた御子イエス・キリストの福音が、この混迷の21世紀の教会に向かって、ミサの中の聖書朗読を通して語られていることを覚えましょう。私たちの救い主は「神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです。」(v.9)

アーメン、ハレルヤ。

10月12日 年間第28主日

知 7:7～11 ヘブ 4:12～13 マコ 10:17～30

1. マコ

v.17 「イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。“善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。”」

いつの時代にも人々は、自らの救いについて考えるとき、自分には何が足りないだろうかと思いついて来ました。救われるためには何をしなければならないのかと尋ねても、聖書はこの質問に直接的には答えてくれません。聖書が語るキリストの福音は、救いが私たち罪人への神の賜物であって、私たちが自らの力によって得るものではないということを、繰り返し説明しています。

今朝の福音書のテキストも、「あなたに欠けている」(v.21) もう一つの善行を主が要求された教訓的な物語りと、考えてはなりません。「人間にできることではないが、神にはできる。」(v.27) それがキリストの福音であり、信じるすべての人に与えられる救いであることを、私たちは今朝聞かされています。

v.19 が十戒(出 20 章、申 5 章)の後半を指していることは、聖書の読者にとっては自明なことでありますから、当然その前半がすべての戒めと掟の前提となっていることに注目しなければなりません。十戒の後半が人が「してはならない」ことを述べているのに対して、十戒の前半は神が御自分の民のために行われた救いの御業を述べて、これを想起することを要求しています。

人が何をしなければならないかではなくて、神が御自分の民にどのような救いを与えてくださったかを想起するという十戒の要求を、主イエスはここで指摘されたのでした。「天に富を積む」(v.21) とは、莫大な施しによって功績を積むということではありませんでした。それは人間には不可能なことです。マタイ福音書はこの主題を、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」(6:21) と解説しています。聖書を学び、神のことばを聞くことに、天上のキリストは現代のキリスト者の心に向けさせようとして語りかけておられます。

2. ヘブ

今朝の福音書の物語りは、「永遠の命を受け継ぐ」「神の国に入る」「救われる」という三つの表現を同一の事柄として扱っています。私たちキリスト者がその生涯を通してこの福音にどのように対応したかが、終末の裁きの日には問われます。「この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません。」(v.13) 人はどれだけ功績を積んだかではなくて、神のことばに対して、キリストの福音に対して、その生涯を通してどのように対応したかを、終わりの日には問われるのです。「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。」(v.13)

人が「持っている物を売り払い、貧しい人々に施し」たとしても、その功績によって神の国に入ることは、

なお困難であり続けます。使徒パウロは、「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、(福音への)愛がなければ、わたしに何の益もない」(Iコリ13:3)と語りました。

私たちの救い主イエス・キリストへの愛、キリストの福音への愛こそが、終わりの日には評価されます。すべてのキリスト者が神のことばを聞くことに、もっともっと熱心にならなければなりません。「神の言葉は生きており」(v.12)、聖書の学びは現代キリスト者にとっての緊急の必要課題です。

3. 知

キリストは私たちにとって「神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです。」(Iコリ1:30)

私たちの人生にとって、キリストとその福音は何ものにも代え難い富であり、罪の赦しと永遠の命を与える神の知恵なのです。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。」(エフェ2:8)

アーメン、ハレルヤ。

10月19日 年間第29主日

イザ 53:10～11 ヘブ 4:14～16 マコ 10:35～45

1. マコ

v.45 「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

主の受難がいよいよ迫って来ていた中で、弟子のヤコブとヨハネがその受難の意味をまだ理解出来ずに、全く見当外れな願いを申し出て他の弟子たちを憤慨させたというこの伝承は、しかしそこで答えられた主の言葉を後の教会の信者たちにひととき印象づける枠組みとして、マタイとマルコ両福音書で採用されました。

後に使徒となったイエスの弟子たちは、皆ヤコブやヨハネと同じように熱心な人々でありましたが、しかし教会は決して人間の熱心によって造り上げられたものではありませんでした。教会は父なる神が御子の血によって贖われた群れであって(使 20:28)、主イエス・キリストこそが「信仰の創始者また完成者」(ヘブ 12:2)であります。

使徒たちの後継者である代々の時代の司教および司祭たちは、教会が根本的にイエス・キリストに依存する群れであることを公に示し続ける責任を担う人々として、ごく初期の頃から制度的に位置づけられて来ました。いつの時代にも教会は、このような叙階された司教を欠いたままで存在したことは、決してありませんでした。既に2世紀初頭の殉教者イグナティオスが、「司教のいるところに教会がある」と言っている通りです。そしてその司教の任務は主の民への「真の奉仕」(教会憲章 24) 以外の何ものでもありません。

2. イザ

主イエスの言葉の背景にあるのが、このイザヤ書の“僕の歌”であります。主の受難は父なる神のみ旨でありました。

v.10 「主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。」

そして、主は自らすすんで命を献げられました。

v.11 「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。」

3. ヘブ

主イエスが大祭司と呼ばれ、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12) ということを理解するためには、旧約聖書の贖罪日のこと(レビ 16章、23章)を知っておく必要があります。毎年第7の月(太陽暦の9-10月頃)の10日は贖罪日と呼ばれて、年に一度この日に大祭司は雄牛と雄山羊の血を携えて臨在の幕屋の奥の至聖所に入って、イスラエルの民のために贖いの儀式を行います。

した。

私たちの主イエスは受難の後、復活して天の聖所に入り、大祭司となって私たちの罪を償うために、御自身の血によって永遠の贖いを成し遂げられたのです(7:27, 9:12)。それは人間の手で造られたこの世の聖所ではなくて、天の聖所で成し遂げられた贖いであり、すべて信じて洗礼の秘跡を受けた人々を将来の神の国に迎え入れる救いです。

私たちの地上のミサは、天上のミサのいわば先取りであり、目標は神の国にありますから、私たちが群れをなして近づく地上の祭壇は、天上の「恵みの座」(v.16)につながっているのだと言えます。共にミサをささげる私たちは、教会が「公に言い表している信仰」(v.14)と、教会が「公に言い表した希望」(10:23)をしっかりと保って、共に励まし合おうではありませんか。「最初の確信を最後までしっかりと持ち続けて……。」(3:14) アーメン、ハレルヤ。

10月26日 年間第30主日

エレ 31:7～9 ヘブ 5:1～6 マコ 10:46～52

1. マコ

他の共観福音書の場合と比べて、マルコ福音書のこの物語りの取り上げ方は非常に描写的です。盲人の物乞いの名前はバルティマイであり、主が呼ばれると彼は上着を脱ぎ捨て、躍り上がって御許に来ました。しかし、このような生き生きとした目撃証言の中で、恐らく最も大切であると考えられたのが、「ダビデの子イエスよ」という呼びかけであったと思われます。

私たちキリスト教会の救い主は、旧約聖書が証言し、ユダヤ人たちが待ち望んでいたメシア、すなわちダビデの子であると、福音書はここで宣言しているのです。使徒たちの宣教の中で、救い主はダビデの子孫から生まれ、死者の中から復活されたと語られ、そのようなイエス・キリストに関する福音が新しいイスラエル(教会)を造り上げて行ったのでした。

教会の信仰と宣教は、抽象的な“神”や“神々”に関するものではなくて、御子イエス・キリストに関するものであることを、現代のキリスト者である私たちは再確認しなければなりません。

2. エレ

エレミヤは、南王国ユダの末期とその滅亡後数年を含む約 40 年間にわたって、預言者としての苦難の生涯を送った人でした。迷信的な民衆の無理解と、愛国的で熱心な職業的預言者および祭司たちとに対抗して、エレミヤは主の言葉を語らなければならませんでした(1:18 参照)。

このエレミヤが、恐らくユダの滅亡後(BC.587年の捕囚以後)に語った言葉が、29-31章に集められていて、その中に今朝の朗読箇所も含まれています。

この預言は BC.516年の第二神殿の完成によって実現したという解釈が、現在の旧約聖書の各所に散在していますが、キリスト教会はこれを、実はイエス・キリストにあって初めて完全に実現したと理解しました。ミサの中で用いられる奉献文の、「これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる、新しい永遠の契約の血である。これをわたしの記念として行いなさい」は、それがエレミヤの預言における「新しい契約」(31:31)の実現であることを指しています。

3. ヘブ

イエス・キリストはこの新しい契約の仲介者(9:15)となるために、父なる神から大祭司となる栄誉を与えられました。

v.6 「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である。」

教会は、永遠の大祭司となった主イエス・キリストによってエレミヤの預言した新しい契約が実現したこ

とを、理解したのでした。

4.

「見よ、わたしは彼らを北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も、歩けない人も …… いる。」(エレ 31:8)

盲人バルティマイのいやしと救いが、このような預言の実現の一環として理解されていることを、私たちは今朝教えられているのです。

「主よ、あなたの民をお救いください。イスラエルの残りの者を。」(エレ 31:7)

これこそ21世紀の私たちの教会がなお存続する理由です。エレミヤの預言の実現は神の救済史の御業であり、私たちの教会は新しいイスラエルの民を造り上げて行く神の御業の舞台なのですから。

アーメン、ハレルヤ。